（口絵解説）

花の病害虫（13）——プリムラ——

多くのプリムラ類が知られているが，オブコニカ，ジュリアン，ポリアンサ，マラコイデスなどが主に鉢花として栽培されている。シクラメン，シャコバサボテン，ベゴニア，サトイモ科観葉類，サイネリアなど多くの鉢花と組み合わせ栽培が多く，単独栽培されることはほとんどない。病害はウイルス病としてモザイク病，細菌病として軟腐病，腐敗病，斑点細菌病，糸状菌病として斑点病，褐斑病，灰色かび病，さび病などの発生が知られている。この中で栽培上問題となっている病害は軟腐病，腐敗病，灰色かび病の3種であり，これらの病害は組み合わせ栽培されている他の鉢花類に病原性を持っているため，相互に伝染しているものと考えられる。

1　軟腐病

本病は，*Erwinia carotovora* subsp. *carotovora* によって生ずる。栽培されているほとんどのプリムラに発生するが，マラコイデスとオブコニカに発生した場合に被害が大きい傾向がある。発生は年間を通じ，苗床でも認められるが，10～12月の開花期の発生は特に被害を大きくする。曇雨天後の晴れた日などに突然萎ちょうする。萎ちょうした株は地上部と地下部が容易に分かれ，地際部が軟腐状に腐敗，軟腐病特有の悪臭を発する。本病の第一次伝染は用土，鉢，ベンチ，他の鉢花類と考えられているが，発病株からは接触，灌水，管理作業などで次々と周辺の鉢に伝染する。

本病は，発病してからではまったく対策がないため，防除は温室内に病原菌を持ち込まないことが大切であり，用土，鉢，ベンチは蒸気などで完全に消毒する。また，発病株は伝染源となるため，発見しだい早めに処分し，薬剤散布する。薬剤としてはポリカーバメート剤，アンバム剤，ストレプトマイシン・銅水和剤などが有効である。また，発病株の置かれていたベンチは，塩化ベンザルコニウム100倍液で消毒する。

2　腐敗病

本病は，*Pseudomonas marginalis* pv. *marginalis* によって生ずる。栽培されているほとんどのプリムラに発生するが，マラコイデスで多い傾向がある。苗床，苗，開花株で発生するが，11～12月と2～3月の低温期の開花株に発生すると被害が大きくなる。苗では初め葉縁が水浸状となり，次いで葉脈に沿って腐敗が進行し，やがて葉身全体が腐敗し，病勢が激しい場合には枯死に至る。開花株では主に外葉が発病し，褐色に枯れる。この場合病徴は葉のみで停止し，株が枯死することはほとんどない。しかし，開花株の外葉が枯死するため，商品価値は著しく損なわれる。

第一次伝染源は明らかにされていないが，本病も他の鉢花からの伝染と発病株からは灌水や管理作業で容易に伝染するため，発病株は他の鉢花を含め早目に除去する。さらに，本病も発病してからでは防除しにくい病害であるため，予防につとめる。防除は苗期と開花期に分けられる。苗期では鉢上げし，活着後に薬剤散布する。軟腐病と同じ薬剤を用いる。

3　斑点細菌病

本病は，*Pseudomonas syringae* pv. *primulae* によって生じ，主にオブコニカに発生する。葉，花梗，がくに発生するが，葉の病徴が主である。初め葉縁に水浸状の斑点を生じ，やがて褐色の斑点となる。病斑が融合すると葉縁が枯れる。ほとんどの場合病徴は葉で停止するが，まれに花梗やがくが発病する。花梗やがくが発病した場合には花は枯死する。

自家採種されている同一温室で発生するため，第一次伝染源としては種子が考えられる。発病株からは接触や灌水で伝染する。発病株は温室外に持ち出すことが望ましいが，病徴が軽い場合には病葉を除去し，軟腐病と同様な薬剤を散布する。また，自家採種の場合は無病株から採種する。

4　灰色かび病

本病は，*Botrytis cinerea* によって生じ，栽培されているすべてのプリムラ類の葉身，葉柄，花梗，花などの部位に発生する。育苗の後半や鉢上げ後葉が混み合うと，葉柄の傷口などから感染して発病する。病原菌は低温，多湿を好むため，加温開始直前の温室密閉期間に多発する傾向がある。

防除は，枯葉や病葉をよく取り除き，通風をよくするとともに薬剤散布する。薬剤としてはベノミル水和剤，イプロジオン水和剤などが有効である。

（栃木県農業試験場　**木嶋利男**）